

A大学 2010年度 前期及び後期

「国際ビジネスマンが見た現代世界」

講座のねらい：国際ビジネスマンたちは異なる歴史、文化、風土の中で、いかにビジネスをしてきたか。成功体験があれば、失敗体験もある。商社、メーカー、金融機関などで、グローバル・ビジネス最前線に立ってきた国際貢献センター会員が次々と教壇に立ち、学生たちに各国の経営環境に対する我が国ビジネスの対応、挑戦の姿を自らの体験を交えて語りかける。

学生のキャリアプランとの関連性を意識して講義を行う

⇒①学生が世界の多様性、各国の独自性を捉えることができること

⇒②学生が就職に際して国際ビジネスを志望し、身近に感じるように動機付ける

⇒③女子学生の国際ビジネスへの可能性は、現在どのような形で存在するのか。その現状に示唆を与える

講義は、前期で米州、大洋州、後期でアジア、欧州など、ほぼ世界全域をカバーする。国際舞台での活躍を希望する外国語大学の学生諸君に夢を与え、その実現に挑戦するためのガイダンスとなる講座を目指す。

【2010年度前期】

	講義テーマ	講義概要
1	アメリカの衣料品産業について—米国婦人ファッションの変遷と流通メカニズム	米国のメジャーインダストリーの一つである、ファッション衣料産業の変遷をレビューし、アメリカ独自の婦人ファッションが世界をリードする実態と、欧州ファッションとの相違点、更には世界一熾烈な競争市場と言われる米国での婦人衣料ビジネスにおける留意点に就きお話しする。
2	アメリカのニュービジネス—アメリカのベンチャービジネスについて語る	講師が見たアメリカのテキサスでのベンチャーの生い立ちや仕組みを考察しつつ、常に変貌するアメリカのニュービジネス社会を捉まえる。ベンチャービジネスがアメリカの活力を生み続けている。その社会的背景や今後日本が考えていかなければならないニュービジネスへの提言にもなる。

3	住んでみたアメリカー 格差社会の検証、海外駐在生活 上のアドバイス、そして進路や 語学の勉強法について	ますます広がる格差社会の例を医療費、給与などの 資料で検証する。また海外駐在生活中での 体験談（コミュニティ内での付き合い、ボラン ティア活動、外国籍の子供達への手厚い 教育システム（ESL）、大学進学等）を語り、受講 者へのアドバイスを送る。 さらには、昨年受講者から質問が多かった進路上 の悩み、語学の勉強法等について、講師自身の体験 を披露する。
4	世界初、超高齢社会日本の選 択—世界の工場の変遷に見る 教訓、アメリカ→日本→中 国・VISTA・NEXT 11?	少子高齢化、所謂人口オーナス（負担）期に入っ た日本の針路は国際化の深化を措いてない。し かし、日本のユニークな社会通念・思考様式が 対アメリカを始めとする異文化交流の妨げにな り、わが国の自称国際企業でも未だ『丸ドメ』と 揶揄されるのが現状である。日米マネジメン ト・スタイルの比較を通じ、日本が人口減少の趨 勢の中で諸外国とウイン・ウインの関係を構築 し、己のポテンシャルに相応しい国際的ポジ ショニングを得て活力を維持できる方策について お話したい。
5	カナダ人のアイデンティティー アメリカ、カナダ、英国のプロ ジェクトから見たもの	カナダの9割近い人は、アメリカ国境へ隣接した地 域で暮らしている。アメリカとの関係は深い。仕事 で接したカナダの印象はアメリカとは大きな違いが あった。英国プロジェクトでカナダとアメリカのメ ンバーと働く機会があり、その経験と当時のスタッ フで現在も在籍するカナダ人からのメッセージか らアイデンティを考察する。

6	カナダの国力、国民性、国際感覚、外交の視点に立って、日本企業・日本人はどのように対応すべきなのか— 世界第2位（日本の26倍）の広大な国土、エネルギー・水・鉱物等の資源を有し、人権擁護、多文化を標榜する大国の現状	人口は日本の1/4の3300万人で、経済がNAFTA等、対米依存7割と気候風土の面から米国国境地帯に偏在。公用語は英語と仏語で、自国文化の保存と古くからの移民による民族的なモザイク・多文化社会を標榜し（仏語onlyのQubec州等）、今後の少子化から移民受け入れが避けられない日本も学ぶべき。英国女王を元首とする立憲君主制、議員内閣制度で政治・外交は米国を多分に意識してのマルチ・多国間外交。外交自主権の確立は1931年、現憲法は1982年と新しく、財政改革が行われて'97年以降は長年黒字財政。健全な金融行政。国際的にも人権、平和機構、環境問題では大きな力を発揮しており、上記いずれも日本が学ぶべき点が多い。
7	ニュージーランド文化と異文化対応—ニュージーランド生活で学んだ“異文化対応と企業の国際人材育成”	1. 企業の国際人材育成：人材のグローバル化が遅れる日本（パナソニック社や韓国企業を例に紹介） 2. 異文化対応の重要性：Panasonic NZ社の経営で学んだこと（実例を基に） この講義を通じ、学生が国際ビジネスに興味を示すと共に、就職や人生を考えるきっかけとなるような講義を目指します。
8	ブラジル発展の原動力—心と物 —①ブラジル社会のカトリック魂 ②BRICsブラジルの特徴	①ブラジルは複合移民社会の中で独特の風土文化を形成した。人種の坩堝の中から友愛のアミーゴ社会が生まれた。日常生活にもビジネスにも、アミーゴ魂が根を生やしている。その社会の根底にはカトリックの魂がある。その心は何か。 ②ブラジルの経済発展の原動力は、豊富な地下資源に加えて、膨大な天然資源にある。それは何か。どのように活かされているか。 ③ブラジルは美人の宝庫、女性優位の国。なぜそうなのか。
9	建国220年を過ぎたオーストラリア—白人国家から多民族国家へ	古くて新しい国オーストラリア。資源と自然環境に恵まれた国オーストラリア。移民の国オーストラリア。日本はオーストラリアとの相互補完関係を、どう維持し発展につなげられるか、皆さんと共に考えてみたいと思います。
10	資源開発と環境との調和に挑戦するオーストラリア—資源立国オーストラリアの課題	アジア諸国と経済交流を深める資源立国オーストラリアにおいて、環境問題といかに向き合い、いかに対応していくのか日系企業との事業連携を踏まえながら考えていきたいと思っています。

11	メキシコ、パナマ駐在勤務の経験よりメキシコ人のアイデンティティー、ラテン的性格の特徴を観察する	1976年～1980年、1992年～1996年の2回に亘りパナマに勤務いたしました。また、1997年～2000年米墨国境に勤務いたしました。現在はFIAL（イベリア、ラテンアメリカフォーラム）に所属、月1回程度の勉強会に参加しています。そんなことより今回はメキシコの歴史と文化の特徴について解りやすくお話できれば、と思います。
----	---	---

【2010年度後期】

1	ビジネスを通して見た中国と中国の人々 China Dreamを支える、日本との差異は？	急速に経済発展を遂げ、世界の大国としての地位を固めつつある中国は、正に「China Dream」を謳歌している。その背景には、歴史や文化に支えられた独自の自信と価値観があり、日本や日本人ビジネスマンがそれを理解しておくことは、ビジネスに不可欠な「相互理解」、WIN-WINの関係を築く上で重要な要素となる。 中国や、中国ビジネスマンのどこが日本や日本人の発想、価値観と違うのか、なぜ違うのかを考えることは、日本を追い抜き、世界第2位の超経済大国となる中国と付き合う上で重要な視点になると思う。
2	韓国・韓国人とつきあう方法 —カルチャーショックを乗り越えれば楽しさは2倍に	地理的に日本海を隔てて隣り合い、民族的にも似通っている韓国人と日本人。しかし、その考え方や価値観、行動には大きな差がある。 韓国人はどのような価値観やルールの中で生活しているのか？ 韓国の社会システム、文化を知れば、目からウロコ！「近くて遠い」と言われている韓国との距離がだんだん近くなる。 今や、韓国人の日本観、日本人の韓国観も変化しつつあり、本当の韓国を知ることにより、旅行が楽しく、ビジネスはやりやすく、友達になれるでしょう。

3	中国での事業展開— 中国でのビジネスに失敗しない ために！	アメリカより大きくなった自動車市場、日本の2倍もの外貨準備高、2010年にはGDPが日本を抜き世界2位の経済大国へ。今やアメリカとともにG2と呼ばれる中国。一方、国内には、農村問題はじめ、極端な格差問題、人種問題、汚職など、依然として難問が存在している。 改革開放のスタートから30年が経過。その間、日本企業は、どのように事業を展開してきたのか！そして、今後の中国はどのように変遷していくのだろうか！現地での製造/販売の実務体験などを通して、これまでの成長過程と問題点、そして今後の対応など、日系企業の視点から考えてみたい。
4	台湾の現状と将来— 親日的、美麗的島国	1972年の日中国交正常化により、日本は台湾との国交関係を断交。しかしいまだに、もともと親日的な国の一つで、アジアの歌姫・テレサ・テンを生んだ国、台湾。 九州程度の国土面積で、外貨準備高は世界のトップレベルにある。国際的孤立化を乗り越え、奇跡的な成長を遂げた台湾。中国との関係、また日本との関係はいかに？台湾の将来を考える。
5	英国と日本— なぜ英国は世界の人々を惹きつけるか？	国土の広さでは日本の約2/3であり、人口は日本の半分程度である英国がなぜ日本とは比べものにならない程の人々を世界中から惹き付けているのか、私なりに経験して感じたことを日本との比較を行いながら、日本が学ぶべきところはないか、これから国際社会に出ていく人達が自覚しておくことは何かについてお話する。また、外国語を学ぶことの大切さについても触れたい。
6	フランスの素顔— 私の体験したフランス	パリで証券業務にたずさわり、市井の人間として9年間生活した経験から、歴史、文化、思想抜きに語れないフランスの素顔を描く。

7	ドイツから学ぶことー ドイツ人と法律の側面から	明治維新以降、近代化の過程で日本がドイツから学んだことの中に法律がある。わが国の民法や刑法はドイツの法律を基礎にしている。そのドイツでは、法律が生活の隅々まで入り込んでいる。国民は規律正しく、規則をよく守る。ヨーロッパと日本の交通システムなど具体例を比較しつつドイツ人が法律とどのように向き合って生活しているかを検討しつつ、法律の役割も考える。 現在のドイツに学ぶべき点として、環境への取り組み、古いものを大切にする心、一人一人の技術力など、今後どのような点を学ぶべきかを考える。
8	スウェーデンから学ぶべきものー 小国でありながら、なぜ世界にあって存在感があるのか	日本は戦後ひたすら豊かさを追い求め、結果GDPベースでアメリカに次ぐ世界第二の経済大国にのし上がった。しかし、高齢化が急速に進む中で、年金、医療、介護等の面で様々な問題が露呈してきている。一方、スウェーデンは人口こそ1000万に満たない小国であるが、世界に冠たる高福祉国家を建設し、真の意味で豊かな生活をエンジョイしているように見える。そんな国の実態を検証しながら、日本が学ぶべきものを模索する。
9	二度の駐在経験から見たオランダー 交流400年をむかえた日本とオランダの関係、小さな大国オランダから学ぶこと	面積は日本の九州ほど、人口は日本の1/8ほどしかない小国オランダは、欧州の列強の中で存在感を示し、着実な歩みをとげている。質実剛健で堅実な生活を送るオランダ人の気質はどんなものか。日蘭交流400周年記念事業を通して見た日本とオランダの関係、この国から、日本が学ぶべきことは何かを考える。
10	インドのビジネス事情ー 変わったインド、変わらないインド	1995年、経済解放直後のインドでの拠点設立、販路拡大の前に現れる思いもよらない問題点をインド独自の文化、商習慣から読み解きます。その後10余年を経て経済発展が著しいインド再訪。現在のインド、そしてこれからのインドについてお話しします。ビジネス社会だけではなく、当時の家族の日常生活も含めた普段のインドも紹介します。

11	アラブ湾岸諸国の水事情— 日本企業の活躍分野と今後の課題	今回は中東諸国の中でも大型河川の無い湾岸6ヶ国(サウジ・クウェート・カタール・バハレーン・アラブ首長国連邦・オマーン)に焦点を当てて、飲料水・農業用水の確保と供給システムはどうなっているのか。日本の企業は水供給のどんな分野で貢献しているのか、また解決しなければならない課題は何なのか検証してみたいと思います。
12	ロシア経済の諸分野に見られる国民性—ロシアでの仕事、生活経験から感じたロシア人の行動の特徴	資源大国ロシアの経済分野で見られるロシア人の行動様式を国民性の視点から見てみる。政府指導者、官僚、企業家、働く人々が見せる行動を実務経験、生活体験から、いくつかの具体例を挙げて述べてみたいと思います。